

■研究十二月往来(290)

《翁》の文句を考える

—「あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」をめぐって—

天野文雄

能の源流的位置にある祝禱芸として神聖視され、「能にして能にあらず」などともいわれている《翁》だが、その《翁》には未解明のことがらが少なくない。そもそも、「能にして能にあらず」という人口に膾炙している「定義」がいつごろ生まれたのかも、じつは明らかではないのだが、「ドウドウタラリ」（現在の観世流の「トウトウタラリ」は明和改正謡本における改変を継承したもの）ではじまる詞章もその例外ではない。また、その「ドウドウタラリ」についても、笛の唱歌（擬音）だとする説と、仏教の陀羅尼（真言）だとする説とが江戸時代からあって、近年では、筆者が陀羅尼説を唱えたのにたいして、高桑いづみ氏が本誌で唱歌説を提示されていて、いまだ決着を見るにいたっていない。このほか、観世、宝生、金春、金剛四流の「神のひこさの昔より」の「ひこさ」なども解明されていない語義のひとつである（喜多流は「みこと」とする）。平成七年の阪神淡路大震災の直後に上梓した拙著『翁猿楽研究』（和泉書院）でも、《翁》の詞章の時代や流儀による違いについては比較的詳

細に整理をしているが、語義についてはほとんど言及していない。筆者はかねてよりその欠を埋めたいと考えていたが、とりあえず、ここでは副題に掲げた翁の言葉めぐって、私見を提示してみたい。そのためには、まず、「あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」がなぜ解明を要する言葉なのかを説明しておく必要がある。

この前後の文句を現行観世流の通常の《翁》の詞章である「四日の式」によってかかげると、以下の通りである。なお、現在の観世流の「四日の式」は古くは「初日」「二日」「三日」の三種があった同流の《翁》詞章の「初日」の詞章である。それを明和改正謡本が改編して「四日の式」としたのだが、明和本廃止後は「四日の式」という呼称は残したまま、これを通常の《翁》の文句として、旧形に復したのである。

翁へおよそ千年の鶴は、万歳樂と謡うたり、また万代の池の亀は、甲に三極を備へたり（中略）天下泰平国土安穩、今

日のご折禱なり、在原や、なぞの翁ども地へあれはなぞの翁ども、そやいづくの翁とうとう

ここは翁が両袖を左右いっぱい広げて祈禱の文句を歌う所で、「三極」は天・地・人の三才のこと。このあと、「そよや」という文句があつて翁舞になるのだが、ここで問題にしたいのは、「在原や、なぞの翁ども、あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」の「翁ども」である。つまり、ここは地謡の部分もふくめて翁のセリフとみてよいところであるから、この「翁ども」は翁自身のことではない。そもそも、ここでは「翁ども」と複数になっている。とすれば、この「翁ども」は誰のことなのか問題になるわけである。

数少ない《翁》の注釈である『謡曲大観』と小学館の新編『謡曲集』はこの点については触れていない。また、これらには現代語訳も付されているので、それを紹介すると、

翁「おや、あれはどういふ老人だ。一体何処の老人だらう。」（『謡曲大観』）

翁へ在原や、何という翁なのか。

地謡へあれはどういう翁なのか。それはどこの翁なのかとうとう。（『謡曲集』）

とされている。この現代語訳からも、訳者が「翁ども」の「翁」を翁とは別の翁であるとらえていることが知られよう。しかし、それに

ついで注は付されていない。いったい、この「翁ども」は誰のことなのであるか。

まず考えられるのは、黒式尉である。つまり、翁はこのあとに黒い翁面をつけて鈴の段と呼ばれる舞を舞う黒式尉のことを「翁ども」と言っているという理解である。それはそれで正しいと思うが、しかし、黒式尉だけでは、翁が「翁ども」と呼びかけていることにピッタリと対応しない。また、黒式尉は、面箱との問答で、「色の黒い尉」と呼ばれ、自身もそう言っているが、「翁」とは呼ばれていないこともいささか気になる。

この点は現在の《翁》をもとにしては永久に答が出ないと思うが、黒式尉のあとに父尉と延命冠者が出ていた古形の《翁》で考えると、回答がえられる。ここでは、父尉は「父尉」と呼ばれる翁面をつけて舞を舞っていたのだが、この父尉はつぎのように自分のことを「翁」と呼んでいる。

一天風おさまつて、民五湖の楽しみに誇り、鱗角傾けず、玉体ましまさず、三皇五帝の昔より伝へ来れる翁なり

これは寛文三年（一六六三）に観世座小鼓の観世勝右衛門（元信）が写した観世新九郎家文庫蔵の父尉の詞章で、それを少し表記を改めてかかげた。「五湖」は多くのテキストが用いている表記だが、「晤語」（くつろいだ語らい）であろうか。「鱗角」は「麒麟の角」で珍しいものたえ。当代はその麒麟の角も傾いたり

していない泰平の世だというのである。「三皇五帝」は中国の伝説時代の帝王のこと。このように、父尉は「彼は釈迦の父の浄飯大王である―自分のことを太古の昔から生きてきた「翁」と呼んでいるのである。もつとも、伝存する父尉の詞章には、自分のことを翁と言っていないものもあるが、それは時代が降るもので、自分のことを翁としているのが父尉の詞章の古態なのである。そうであれば、「あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」の「翁ども」は黒式尉と父尉のこととみてよいことになろう。また、「尉」はもちろん老人のことだから、黒式尉を「尉」と言って「翁」と言っていないことは、とりたてて問題にする必要はないことにもなる。

これを要するに、現在の《翁》の「あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」は、父尉が登場していた古態の《翁》における文句であり、父尉が登場しなくなつてからも、そのまま残され、その結果、不可解な文句になつてしまつた、そういう経緯が考えられるわけである。

これで当面の問題は解決したのではないかと思うが、以上の知見をふまえると、《翁》の構成などについて、新たにみえてくることがある。たとえば、翁の「あれはなぞの翁ども、そやいづくの翁」の「翁ども」が黒式尉と父尉への呼びかけであるならば、その場にはすでに黒式尉と父尉が登場しているほうが自然である。現に、現在の《翁》では、このとき、黒式尉の役者が舞台に出ているのである。

また、翁舞が終わつたあと、翁は「千秋万

歳の、飲ひの舞なれば、ひと舞舞はう万歳楽、万歳楽、万歳楽」と謡って退場するのだが、ここは、すでに翁舞が終わつたあとであり、そこで「ひと舞舞はう」と言っているのが、筆者には以前から疑問だった。ここは『謡曲大観』では「さし万歳楽をまはう」と現代語訳され、小学館の新編『謡曲集』も「一舞舞うことにしよう」と訳しているが、すでに翁舞は終わっていることを思うと、やはりこの訳は釈然としない。しかし、「あれはなぞの翁ども」が黒式尉と父尉をさしているとなると、この「ひと舞舞はう」はその場に出ている黒式尉と父尉に対して、「さあ、ひと舞舞おうではないか」と勧めているという解釈が可能になる。つまり、この「舞はう」の「う（む）」は意志ではなく勧誘の「う（む）」ということになる。このように考えると、《翁》は天下泰平をことごとく三種の翁の舞によつて構成されていることが、いよいよ明確になるかと思う。また、こうしてみると、従来、戯曲的なまとまりがないとされてきた《翁》にも、それなりのまとまりのあることがみえてくるように思う。

これで、「あれはなぞの翁ども」については、とりあえず解決できたかと思うが、その前の「在原や」もじつは語義不明の語である。これは、そのあとの「あれはなぞの翁ども」の「あれは」と同じ意味の語かと思われ、「あれは」の転訛ではないかと思つているのだが、どうであろうか。

（財団法人国際高等研究所副所長、大阪大学名誉教授）